

ニューズレター

第9号

特集 「 震災とダンス 」

目 次

この時代におけるダンスのチカラ

「 震災とダンス ～復興に向けて 4年8カ月の支援活動～ 」

鈴木裕美子 （ 福島大学教授 福島大学附属特別支援学校校長 ）

2

関連テーマ

「 福島県の民俗芸能と復興ステージの変化 」

4

一柳智子 （ 郡山女子大学短期大学部 教授 ）

私の研究テーマ

6

「 Contemporary ⇄ Site Specific ～瞬間の共有のために～ 」

関 典子 （ 神戸大学大学院 准教授 ）

あの人にこの質問を

「 被災地での共創表現 」

8

西 洋子 （ 東洋英和女学院大学 教授 ）

舞踊学会 第67回舞踊学会大会のお知らせ

15

掲示板

17

事務局便り

18

編集後記

18

この時代における ダンスのチカラ

「震災とダンス ～復興に向けて 4年8カ月の支援活動～」

鈴木裕美子（福島大学教授 福島大学特別支援学校校長）



2011年3月11日、突如襲った大震災。津波に流された尊い生命や大切な財産。倒壊した家屋、遮断された交通網、ストップした流通。地震、津波、放射能、風評…。

県内の学校は1カ月開始が遅れ、文化活動、スポーツ活動は停滞し、教師は講習の機会を失い、採用候補者選考も一部を除いて中止になりました。クラスの学生のお母さんは津波に流され、ダンス部の卒業生の一人は福島県の教員になることを諦めて宮城県の教員になり、ゼミ生は会社の内定を取り消されて役者になりました。避難生活は限界に達して、大人たちのストレスは子どもたちにもろに伝わってきいていました。ストレス、外遊びや土いじりの制限などにより懸念されていた子どもたちの学力・体力・精神力・感性の低下が現在問題になっています。

震災後の4年8カ月、復興のために、私は公的・私的に様々な活動をしてきました。

初めに取り組んだのが、福島大学の体育館に避難されていた120名ほどの方たちの支援でした。子どもたちの勉強や遊び、スポーツ・ダンスの支援、大人たちの健康づくり支援、コンサートの開催、クッキングボランティアなどに参加しました。週に2回の健康づくり支援は、ダンスや体操、ゲームなどを行いました。参加者たちから、身体を動かしている時間は、辛いことを忘れられるから楽しいので、毎日やってほしいとリクエストされました。

5月9日の入学式の前に、避難していた方たちは公共の体育館などに移動しました。私たちは、自家用車に学生を乗せ、避難所に行って子どもたちの支援をしました。避難所では段ボールの仕切りに囲まれ、プライバシーは保証されていませんでした。また、子どもたちの問題行動が目につき、私たちは心を痛めていました。そんな中、行政や民間の様々なボランティアが避難先を訪れ、支援活動を行っていました。子どもたちの学習支援の日、県内の舞踊団も慰問に来ていて、グループに福島大学の卒業生を見つけたこともありました。



[ダンスで広がれみんなのWA！]

第52回福島大学創作ダンス発表会 2011. 12. 18]



[避難している子どもたちと 2012. 6. 16]

翌年からはバスで仮設住宅に住む子どもたちを集め、大学で「土曜子どもキャンパス」を開催し、毎回運動の時間を設けました。初回のことです。私は、なわ、ゴム、フープ、竹、ボール、パラバールンなど用具や音楽を準備して体育館で待っていました。子どもたち24人が誘導されて到着した途端、クモの子を散らしたように、並べてあった用具を各自思い思いに手に取り、勝手に遊び出してしまいました。これが自然な姿なんだと思って、参加されてたボランティアの方に聞いたら、「仮設住宅は狭いし、体育館のような広い場所で思う存分からだを動かす機会がなかった。運動に飢えていた」とのことでした。学習の時間に参加された小学校の先生が、「子どもたちは、表現することが苦手」と言われた言葉も気になりました。

震災から7カ月後、全町避難を余儀なくされた富岡町の方たちが、避難先の大玉村でさくらスポーツフェスタ2011（主催：さくらスポーツクラブ、共催：富岡町教育委員会、後援：富岡町他、協力：福島大学他）を開催しました。私は「健康体操」のコーナーを担当し、ダンスや体操を実施しました。各地を転々と避難し心身を疲弊している方々に、生涯スポーツに親しみ、相互の親睦を深め、交流を図る機会を提供するとともに、避難中のストレスや孤独感の解消を図り、厳しい現実生活に立ち向かっていくための「元気力」を養ってもらうことが目的でした。7カ月ぶりに一堂に会した町民の方たちは、お互いの無事を確認し、避難先へ戻っていきました。2013年3月25日、富岡町は警戒区域解除で立ち入り可能にはなりましたが、宿泊は禁止されています。町役場は現在も郡山に事務所があり、学校は全て町外に避難し、子どもたちは仮設校舎で勉強しています。

海外からのヨガやダンスの支援もあり、私は2つのプロジェクトに関わりました。

1つは、ハワイからのALOHA FUKUSHIMA KEIKI（福島の子どもたちを保養のためカウアイ島に招待しよ

う）というプロジェクトで、福島市内の幼稚園・保育園にてヨガのワークショップを行いました。英語の説明も子どもたちには通じたらしく、大喜びでした。障がいがあるため、いつも保育士に抱かれている女の子も楽しそうに身体を動かしていました。終了後、子どもたちは講師の先生に触りたくて、駆け寄っていきました。（2012年10月）

もう1つは、ロンドンのNPOスライドとふくしまフレンズUKの共同プロジェクトで、9月に福島県内5カ所でワークショップを開催しました。福島大学も会場になり、障がい児、保護者、教師、大学生約90名が30分ずつ3回に分かれてのセッションを受講しました（学生は3回受講）。翌日、2社の朝刊に、「即興の創作ダンス インクルーシブダンスを体験 英国の2団体が紹介 福大」「ダンスで笑顔と健康を 福島大 子どもらに英講師伝授」の見出しで、写真入りで報道されました。（2014年9月）



[インクルーシブダンス 2014. 9. 20]

他に、私が兼務している福島大学特別支援学校には、アメリカから、ヤングアメリカンズの東北ツアーの申し出もありました。

支援を受けるだけでなく、発信もしてきました。

2011年11月、パース日本人学校（オーストラリア）東日本大震災支援チャリティー祭にて「福島からの報告“地震・津波・放射能汚染・風評”被害の中で」を報告しました。2012年11月には、在パース日本国総領事館公邸（オーストラリア）にてKIZUNA（絆）プロジェクト壮行会に参加しました。西オーストラリア州の高校生33名と保護者、教師、AFS担当者、総領事館関係者、外部の関係団体（教育省、豪日協会、JETAA）の方たち70名分の蕎麦を川内村の蕎麦職人が打ちました。2014年7月には、イギリス国会議事堂リバールームにて開催された復興行事「起き上がり小法師展」に招待され、団長として参加しました。その日の午前中、パリッシュ教会英国国教会小学校を訪問し、郡山の高屋敷稲荷神社の巫女舞を紹介しました。

震災・原発事故という未曾有の災害を経て思うことは、復旧・復興のために、まず食料の確保やライフラインの復旧など、生活を再建させることが優先され、次に拠り所となる文化を見つめ直し、誇りを取り戻すこと、そして何とかしようと気付いた人が声をあげ、できる人が、できる時に、できることを実行していくことから前に進んでいけるということです。災害はこれからも起きるかもしれません。被害を未然に防ぐ知恵と、不測の事態でも、私たちが多くの方々に助けられて希望を失わなかったように、人とのつながりが生きる力となり大切なことだと思います。

第67回舞踊学会大会では、「福島県民俗芸能」をテーマに、震災後に生活基盤が安定しない状況におか

れても、民俗芸能を復興させていった原動力は何か、福島県を中心に、被災地の民俗芸能の現状と復興について報告を受け、人々の暮らしの中で民俗芸能や民俗文化がどのように根付いていたのか、そして、今後どうなっていくのか、皆様とともに考えていきたいと思っています。舞踊が果たす役割について再認識できる場となれば幸いです。

関連テーマ

「 福島県の民俗芸能と復興ステージの変化 」

一柳智子 （ 郡山女子大学短期大学部 教授 ）



自然災害はなにも東日本大震災だけではない。この4年半の間に日本国内のみならず地球規模で多くの深刻な災害が発生している。自然災害からの避難民ではないが、シリアをはじめ政治的難民問題も耳に新しい。こう次から次へと人間の存立にかかわる問題が勃発すると、以前のことは忘れてしまいがちであろう。しかし、忘れていいことと忘れられないことがある。

筆者は、福島県郡山市へまさに東日本大震災直後に着任した。住居を決めるために数日前に郡山市にいたが、3月11日当日にいなかったので私は被災者とはならなかった。

東日本大震災は、周知のように主に東北地方太平洋側3県が被災した。その後国をはじめ世界各国からこの3県に対して手厚い対応がなされてきた。そして今年に入り復興庁は、震災復興の中期的段階に移行したと分析し、復興過程の異相に着目し、「心の復興」のスローガンを基に策定しなおした。

ここで、震災後筆者が関わった事業をご紹介します。文

化庁は、震災直後被災3県それぞれに民俗芸能の被災状況の調査を開始した。福島県は、民俗芸能学会が母体となり被災調査団が発足した。そして浜通りの被災状況の重篤さが報告されるに従い、調査の重点は浜通り13市町村のうち特に相双地方に集中していった。

福島県は自然災害に加えて原子力災害が大きなウエイトを占めているので、何事も3県一律には語れないのが実情である。たとえば、現在被災者用の公営住宅が盛んに建築されているが、避難の原因別に「災害公営住宅」または「復興公営住宅」と名称を分別している。

震災直後、この調査団の調査員として、仮設住宅あるいは借り上げ住宅を回り、被災者の方々の話に耳を傾ける機会を頂いた。浪江町津島のA氏は、国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」であり「福島県指定重要無形民俗文化財」に指定されている「津島の田植踊り」の保存会の庭元である。調査に伺った時は、本宮市の仮設住宅にお住まいであった。職業は酪農家である。ご自宅には広い農場があり、住宅もかなり広いようであった。航空写

真で拝見した。牛たちの一部は山形の畜産農家があずかってくれるとのことで、ご子息家族は牛たちとともに山形へ避難している。だが残りの多くの牛たちは殺処分せざるを得なかったとうつむいた様子で語られた。浪江町津島地区は、放射線量が極めて高い地域であり、現在でも福島第一原子力発電所のある双葉町と大熊町等とともに帰還困難区域となっている。

A氏にお話をお伺いしたのが平成24年1月。直後の2月に訃報が届いた。A氏は平成24年3月復興庁が発表した関連死761名のうちの一人となった。この関連死はその後毎年増え続けてきた。

文化庁による民俗芸能の被災調査団では、このように1軒1軒丁寧に回ってお話をお伺いした。上記の「津島の田植踊り」は、残念ながら未だ復興を遂げていないが、それでも南相馬市の「北萱浜の天狗舞」、大熊町の「熊川の稚児獅子舞」など多くの民俗芸能が復興している。

次に筆者が関わったのは、福島県による「福島県民俗芸能継承状況アンケート調査」であった。事務局代表として全調査業務を行った。福島県全県下の保存会会長または副会長、地区長、その他の関係者らに紙媒体を郵送する形でアンケートを送付し回収した。回収率は68.5%となり、まずまずの数字となった。ただ浜通り地方の回収には困難な点が多かった。しかし、その当時の避難先の居所および電話番号などの連絡先を確認できた点については、一定の評価をすることができた。先行した被災調査団の調査結果は避難状況の確認にとどまっていたが、本調査では、ある程度避難の状況が数値化され、データの集積となったことは大きな収穫であったといえよう。

こういった国や県の民俗芸能に対する対応によって、民俗芸能の重要性が再認識され、それは現在の復興施策の策定理念の一つ「心の復興」もとの「生きがいつくり」事業に組み入れられることとなった。被災者の方々の心身の健康のために、民俗芸能の存在と継承は大きく貢献できるとするものである。震災直後の物質的喪失感への支援から、復興ステージの変化に応じてスピーディに対応しようとしている。

そもそも民俗芸能自体全国的に衰退が危惧されてから久しい。少子高齢化、過疎化などと種々要因が分析され、今後どのようにすればよいか議論が継続されてきた。民俗芸能の真正性を根拠に本質論に依拠して、変質の可能性を危惧し、新しい現代のかたちを偽物と断罪してきた研究者たちはそれでも次の段階を提示できないでいた。行政はお祭り法を盾に現実に対応している。そんな状況下での震災であった。

そして、今民俗芸能の効能が再認識された。踊りを踊る人も踊りを見る人も、生の人間である。踊りを見る人は、以前の自分の地域の民俗芸能を以前の地域の人々が踊っているのを見て、カタルシスの効果を得ている。民俗芸能の新たな存在意義が再認識されたような気がする。故地を離れて暮らすことを余儀なくされている人々にとって、震災前に慣れ親しんだ地元の芸能は、忘れられないものであるのだ。

私の研究テーマ

「 Contemporary ≡ Site Specific ～瞬間の共有のために～」

関典子 (神戸大学大学院 准教授)



撮影：小椋善文

2015年10月25日、快晴の兵庫県立美術館・屋外大階段にて、Site Specific Dance Performance #5『動物の謝肉祭』を開催いたしました（総合演出・監修・振付：関典子、振付・出演：舞踊ゼミ他有志）。2009年より「神戸ビエンナーレ／兵庫県立美術館と神戸大学の相互協力協定事業」として隔年開催している企画です。

このシリーズで最も重視しているのは、その名の通り、「Site Specific」すなわち「場の固有性」を活かし、異化すること。1月末まで開催中の早稲田演劇博物館『Who Dance? 振付のアクチュアリティ』展の第2部が「踊り場の生成—どこで踊る?—」と題されている通り、現在ダンスは、劇場に限らず様々な空間で展開されています。展示では「振付が身体感覚や経験の共有を可能にする空間を生成している」例が紹介・検証されていますが、「場へのこだわり」とはまさしく、「今・ここ・瞬間の共有」としての「con（共に）+ temporary（一瞬の・束の間の・儚い）」と同義であると言えるでしょう。一度きりのパフォーマンス。それはとても儚いものですが、だからこそ、移ろいゆく風景と生身の身体が交感する様を通して生の実感を伝え、共有することを目指して参りました。

本稿では、本号のテーマ「震災とダンス」に即した事例をご紹介します。兵庫県立美術館は、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災からの「文化の復興」のシンボルとして、2002年に開館されました。SSDPの舞台となる屋外大階段は、美術館の顔とも言えるシンボリック空間です。眼前に広がる海、空まで続くような大階段、コンクリートの硬質さを湛えながらも移ろい続ける時間や自然を感じさせる両義的な空間、普段は地域の人々の憩いの場ともなっているこの大階段を、ダンスを介することで活かし／異化し、新たな魅力を引き出すこと、それが、SSDPの目的です。

2013年、初演100周年記念『春の祭典』は、翌年「加川広重 巨大絵画がつなぐ東北と神戸2014」（デザイン・クリエイティブセンター神戸KIITO）にて、改訂再演の機会を得ました。大階段で上演した作品をフラットな空間で再構築することには苦難も伴いましたが、2011年の東日本大震災を題材に描かれた巨大絵画（5.4m×16.4m）が対峙する展示空間には、宮城生まれの画家の実体験に起因する根源的な強さが満ち、震災が人々にもたらしたものを、時と場を超えて、一瞬にフラッシュバックさせる力を放っていました。凍てついた大地が割れるように訪れるロシアの『春の祭典』と、雪と日の光を描いた『雪に包まれる被災地』『南三陸の黄金』の親縁性。震災と復興への祈り、生贄と祝祭……。これらのイメージに導かれるようにして、一対の絵画を行き来する演出・空間構成が像を結び、「今、ここ」を共有する、この場ならではの『春の祭典』として、再生を果たしました。

今年の『動物の謝肉祭』開催が決まった頃、大階段には大きな変化が生じました。震災20年のモニュメントとして、ヤノベケンジ作、全長6mの『サンシスター』が設置されたのです。過去・現在・未来を見つめ、希望の象徴としての「輝く太陽」を手に持ち大地に立つ少女像。それは、東日本大震災からの復興を祈念する子ども像『サンチャイルド』（2012茨木市）の姉として、世界中の全ての災害からの復興・再生を見守る存在です。その存在感に対し、我々ほど



のような『動物の謝肉祭』を創出できるのか……。この曲は、他の名曲のパロディや動物の鳴き声を模したメロディなど、サン＝サーンスの遊び心に満ちた楽しい曲です。同時に、ヒト含め、「命」というものについて、考え、感じさせてくれる楽曲でもあります。

「謝肉」は本来、「肉食を禁じる」という意味ですが、「肉に感謝する／謝る」……とも読めますね。我々は、他の生き物の命を食べて、生きている。そうした命の連鎖や感謝の思いも、作品に込めました。ともあれ、謝肉祭とは「カーニバル・お祭り」です。安藤忠雄建築・ヤノベケンジ作品・空・海・空間が踊り、総勢15名の出演者が全曲30分余りを駆け抜ける「私たちの」『動物の謝肉祭』は、これ以上ない秋晴れと、大階段を埋め尽くす約400名のお客様に見守られ、無事に終演いたしました。

こうして振り返ってみると、今、この瞬間を、生身の存在同志が交感するダンスという表現の尊さを感じずにはられません。私は兵庫県宝塚市出身で、阪神・淡路大震災を経験しました。私の周囲には大きな被害はなかったものの、鮮烈な経験であったことは確かです。夜明け前、誰かに身体を揺すぶられているのかと錯覚したほどの揺れ、崩れた本物の山から這い出すと割れた水槽があり、どこかに飛んで行ってしまった金魚を救えなかったこと、体育館に避難した数日

間……。私の経験は些細なものですが、街並みから瓦礫が見えなくなっても、被災者やその家族にとって、震災はどれだけ時間が経ても、「今、ここ」の出来事であり続けているはずです。そして、震災に限らず、ダンスやアートは、観る人の無意識に働きかけ、単なる鑑賞から行動へと、今、あなたは何を思い、何をすべきなのかを、人々に問いかけ、駆り立てる力を有していると考えます。そのためにはまず、どんな舞台においても、全身全霊で向き合うこと。ダンサーとしても研究者としても、この時代を生きる一人として、踊り続け、語り継いでいきたいと、覚悟と共に、念じております。



あの人にこの質問を 第9回

「被災地での共創表現」

西 洋子さん

(東洋英和女学院大学 教授)

インタビュー・構成 弓削田綾乃

協力 仙田麻菜



—— 2011年の東日本大震災後、西先生は、被害が大きかった宮城県の沿岸地域で身体表現ワークショップを継続されてきました。震災から約4年半がたつ今、これまでのご活動を振り返っていただきながら、ダンスが何をしていけるのかお聞きできればと思います。まず、西先生は長年、東京でインクルーシブな身体表現活動「みんなのダンスフィールド」を続けてこられました。いつ頃から始められたのでしょうか。

西(以下N): 1998年に、6人の子どもたちが集まったのが最初です。年齢や性別、障害の有無の異なる子どもたちでした。その2年前の1996年に新宿区の戸山サンライズで、子どもやダンスをしている人、車イスの人などが一緒に踊るパフォーマンスを試みました。「みんなのダンスフィールド」(Inclusive Field for Dance)は98年の開始ですが、インクルーシブな身体表現の場を創ってみたいという思いは、その2年前くらいから持っていたのだと思います。

—— 約20年のご活動になるのですね。その間、ずっとインクルーシブダンスの考えを広め、実践されてきたと思います。そして2011年の震災の後、宮城県石巻市と東松島市を中心とした地域に、ずっと足を運んでこられて、現地の方々と活動されてきました。それを短くまとめるのはとても難しいと

は思うのですが、あえて一言で表していただくとしたら、この活動は、どういったものなのでしょう。

N: 「共創」——「共に創る」ということでしょうか。「みんなのダンスフィールド」の活動もそうですが、表現の世界はすべてが対等で、「する／される」という関係性を超えると思っています。ダンスも身体表現も「共に創る」ことで、自己をも超える表現が生まれる・・・、それを大切にしています。

—— 初めて訪問された時の印象をお聞かせ願えますか。

N: 震災当時、私は足に怪我をしていたので、歩けるようになった2011年の9月に初めて宮城県に伺いました。もう本当に、大変な・・・言葉にならないですね。言葉には到底できない光景が、同じ日本の中に、目の前に広がっている。とにかく、まず自分がその地に身を置く・・・ただそれだけで精一杯でした。最初から目的が明確なボランティアは、たくさんありました。瓦礫を撤去するとか学習支援をするとか。でも表現の実践と研究を行う者として、何ができるのかは全くわからないけれども、身体表現だからこそ、できる何か、一緒に創れるものがあるに違いない、その思いだけで、具体的なプランは何もなく被災地にでかけました。当然、何もできません。それでも1ヶ月に1回は行こうと決意して、最初は津波の地をまわったり、仮設住宅を訪ねてお話を伺ったり、そのうちに少



[NPO法人「みんなのダンスフィールド」 (Inclusive Field for Dance)]

しずつワークショップのようなことをはじめました。参加者が一人二人、数人という状況が続きました。繰り返し現地に足を運んでみると、大変な状況の中、何とか生活を再建しようと必死に努力されている方たちがいる。そして、その側には、大きく変わった生活環境に戸惑う子どもたち、特に障害のある子どもたちが多くいることが、だんだんわかってきたのです。



[名取市関上(上) 石巻市立門脇小学校 (下)]

—— 西先生のように何かをしたいと思っても、実際に行動して継続するのは難しいことだと思います。先生の場合、具体的な始まりの状況はどのようなものだったのですか。

N: 仙台市の本多直人先生(仙台徒手医学療法 SORA代表)のご紹介で、先天性ミオパチーという筋肉の病気で、身体がほとんど動かない永浦茉奈ちゃんのお宅に伺いました。人工呼吸器を装着し、震災直後は、電源が確保できずに、手動の蘇生パックで何とかしのいだとのことでした。震災とその後の生活環境の変化で、かなり大きなダメージを受けていると伺い、言語での表現が難しいので、身体で一緒に表現できたら・・・と思いました。ご自宅は仙台空港に近い名取市、津波の被害が大きい地域で、お父様は仙台空港にお勤めでした。

—— そのようにして現地の方と少しずつ関わりながら、つながりをつくっていったのでしょうか。

N: 例えば行政を通しての支援という方法もあったのかもしれないけれど、被災地に立ったとき、「支援」という立場はとらないという思いをもちました。長年、「共創」の工学研究をされている、早稲田大学理工学術院の三輪敬之先生のグループが一緒でしたし、現地には三輪先生のご友人の本多先生もいらしたので、「共創」を軸に、表現を通して新しい何かを築くことはできないだろうか・・・と思いました。

—— では、具体的な活動のお話を聞かせてください。現在の活動の中心地は、宮城県石巻市と東松島市。その周辺も含めて、現地の方々がメインで参加されているということですね。

N: はい。通っているうちに、現地の方々とのおさまたなつながりを得て、2012年の12月から東松島市での月に1回の定例ワークショップが開催できるようになりました。



[東松島ワークショップ]

石巻市の方は、震災後に石巻の中心部にできた児童福祉サービス「みらい」の子どもたちと先生方が中心で、2013年の4月からです。



[石巻「みらい」ワークショップ]

参加者は発達障害—主には自閉症スペクトラム障害の子どもたちとその家族、教育や福祉の関係者、関連する一般市民の方たち、誰でもどうぞ、としています。

—— ワークショップでは、共創的身体表現、特に「てあわ

せ」が中核になっていると思います。この「てあわせ」についてご説明いただけますか。



〔子どもとのてあわせ表現〕

N: コンタクトインプロビゼーションが社会にでてきた頃に、様々な手法が試みられたと思います。私自身もいろいろな試みをしました。当時私は、精神科に入院されている患者さんや肢体不自由の子どもたちといった、自分から主体的に動き出すことが難しい人と一緒に表現を創る活動を行っていました。例えば眼差しさえ発現しない患者さんは、どこか身体の一部が接触していないと動くことも立ち上がることもさえないかなかったです。車イスの子どもは、車イスをこぐと両手が塞がってしまう。でも手と手を合わせると、そこを起点に自由な交流が生まれるし、車いすも動く。2、3歳の子どもでも、こちらが手をだすと、微笑んで手を合わせてくれます。手は、握手やタッチなど、他者との触れ合いに馴染みやすい部位ですし、関節がたくさんあるから、子どもでも複雑な動きが可能です。相互に手を合わせて、その細やかな動きを全身へとひろげていくと、お互いが同時的に創り合う対等な関係性から新しい表現が創出する・・・。

今は、この「てあわせ」を、多様性を包摂する身体での共創表現のミニマムモデルに据えて、そのダイナミクスを三輪先生らと一緒に研究しています。ほかにも、理論系の研究者や精神医学、臨床心理学の研究者といった、舞踊学だけでなく、他領域の方々が、てあわせ表現に関心をもち、一緒に研究を進めてくださっています。

こうした研究者の方々は、実践現場に何度もいらっしゃいます。舞踊経験も何もない他領域の研究者が、現場においてになり、ご自身の身体で何回も何回も経験されるのです。そのうえで、新しい実験や理論を構想されようとする姿勢は、本当に素晴らしいと思います。その姿から学ぶところは多いですね。

—— ワークショップで、心に残るエピソードはありますか。



〔東松島・石巻市でのてあわせワークショップ〕

N: 今年7月に、石巻市の遊楽館でワークショップをした時のことです。現地の方々が、ファシリテータをされました。このとき、てあわせの野原が出現したかのような場面がありました。その場にいる人たちが、自然にてあわせをはじめて、会場のそこかしこで表現が生まれました。みんながそれぞれに動き、それでいて全体としてひとつの生命のようにまとまっている、不思議な感覚でした。人と接するのが苦手で、逃げ

回っていた自閉症の子どもたちが、ありのまま、ごく自然にその場にいて、当初は子どもの付き添いだけで、自ら進んで表現はしなかった保護者の方々が、今ではファシリテータをされていて…。誰かがどうぞと誘わなくても、皆が他者と一緒に、「私たち」の表現を好きに自由に、遊ぶように創って、その場が相互につながり合いながらどんどん膨らんでいく…。とても創造的な光景で、外の石巻の自然の風景とも重なり合って、風の流れる野原のようでした。その場が眩しくて、なんて素晴らしい人たちなのだろうと、心からそう思いました。

こうした時の人間の表現は、このうえなく綺麗です。プロの舞踊家のダンスも素晴らしいですが、誰の中にもある生命性が響き合って表現が生まれる時の輝き、私はそれが大好きなのです。でも、なかなか自分だけでは発現しない。他者や自然といった周囲の環境と関わることで、個の意図を超えて、ある瞬間に表現となって自ずと現れるものだと思います。そういう表現に出会えたときは、私自身が本当に幸せです。被災地に、表現の野原が出現したことは、素晴らしいことだと思います。

—— 子どもたちとのエピソードでは、何かありますか。

N: たくさん子どもたちとのかけがえのない出会い、いっぱいありますけれど…やはり戸田智之君とのかかわりが大きいかな。彼は、言葉を話さない自閉症の男の子です。この3年間、ワークショップは1度も休まず全て参加しています。最初は2時間のワークショップ中で、ハイタッチ1回がやっとでしたが、今はあわせ自体が深まってきました。それだけでなく、創作をしましょうというときも、言葉のやりとりはないのですが、一緒に創っている感じがしています。彼は、ワークショップの最中に、みんなの表現がつながり合ってよい場ができると、入ってくるんですよ。あるいは中央を横切ったりする。だから、視覚とは別の感覚で、表現の場全体を捉えているのだと思います。世界の捉え方が違うから、その分苦労もあることでしょうが、表現の場は、感覚とか認知の差異をも超える可能性があることに、気づかされました。人間って素晴らしいと感じます。

3年間の中で、智之君との表現が上手くいっていないと思う期間もありました。ずっと右肩上がりに進むわけではないか

ら。でもね、その期間もワークショップの映像を何回も何回も見直すと、私の側の一方的な見方で停滞していると思っていた期間に、実はすごく大きな変化が起きていたことに気づきました。思い込みや既成概念で、上手くいっていない、停滞しているというのは全くの誤りなのだと。身体はとても正直で、自分では認識できないような細かい段階をつくりながら進み、ある時、表現としてぱっと開花するという事実を、学ぶことができました。



[WSでの戸田智之君]

ワークショップの映像を見るのが楽しくて、関東に戻ってくると、ずっと見ているんですよ。1ヶ月に1回のワークショップの質を決めるのは、会わない時間に何を思い、何をするかということだと思います。映像を見たり、あれこれと考えたりしていると、新しい発見がどんどんあります。こうしたことを、直ぐに科学的に研究するのは難しいのですが、新しい出会いがあって、丁寧に人と関わって自分がこれだけ変わった…私自身が、私の感じる世界を少しでも変えることができたのは、智之君、そしてワークショップで出会ったすべての方たちのおかげだと感謝しています。

—— ワークショップには、学生たちも参加しています。東洋英和女学院大学の西ゼミ生や、早稲田大学の学生さんたちの中には、一人で10回以上通っている方もいますよね。毎回、自分でお金を出して新幹線に乗り、宿泊代も払ってというのは、大変なことだと思います。

N: 本当に、頭が下がる思いです。他者と共に育ち合いた

いと願っている学生はたくさんいるのだと、嬉しく感じます。私のゼミ生の中には、卒業してからも継続して参加している人たちがいます。彼女たちは、現在は幼稚園教諭で、その日々はとても忙しいと思いますが、やはり、このワークショップを被災地の方々と一緒に創ってきたという思いがあるからなのでしょう。教師となって、新しい現場で子どもたちと出会い、被災地で創り合ってきた経験を、子どもたちとの共創に活かそうとしているのです。共に創る身体感覚を忘れそうになると、またワークショップの場に戻ってくれるのだと思います。そう考えると、1ヶ月に1回というのは、いろんな立場の人にとって、ちょうどいいですね。

—— 学生に聞くと、最初は「自分には何ができるのだろう、何をしてあげられるか」という思いで行くけれど、行ってみるとそんな思いは忘れて、逆に自分の方が育てられると言っていました。

N: そこが、共創の価値だと思います。現地の方々も関東からの参加者も、それぞれに大きく変容しました。一番変わったのは、私かもしれない。自閉症の子どもたちが、これほどたくさん参加してくれるワークショップは、私自身初めてです。今では、石巻にある宮城県立石巻支援学校に伺うと、この子も知っている、あの子も知っているというくらい、この地域の障害のある子どもたちの多くが参加してくれています。熱心に声かけをしてくださる現地の方々や、支援学校の先生方に感謝です。

—— 自閉症の子どもたちの表現が、どんどんどんどん変わってきて、感動しました。

N: 感動しますよね。最初の頃は、部屋から逃げだしていましたから。震災直後の避難所での集団生活は、大変な困難であったと聞いています。今は、私たちをみつけると手を合わせにきてくれて、一緒に表現をはじめ、自分から誰かを誘いに行くほどに変わってきています。もちろん言葉がない子が多いのですが、信頼や安心といった身体から育まれる関係性が創られて・・・それは、障害のある子どもたちだけではなく、現地の方たちや関東から参加する私たちも含めて、皆そうなのではないでしょうか。身体と表現の力を信じたいと思っています。

—— ワークショップに参加されている方は、大なり小なり、被災を経験されていると思うんです。それについて、うかがってもよろしいでしょうか。

N: 最初は、やはり訊けませんでした、何も。地域全体が被災していて、個々の状況はいろいろあるのですが、ワークショップをはじめた当初は、そんなことは訊けないです。他の地域から来ている私たちには、話したくもないことでしょう。でも、少しずつ身体で関わって、一緒に表現するという、たったそれだけですが、積み重ねていくと、「あの時はこうだった」とつぶやくように話してくださいます。「家族は大丈夫だったけれども、親戚が津波の被害にあった」「友人が・・・」「家は・・・」などと・・・。1年以上経ってからでしょうか、何気ない会話の中で話してくださるようになって、それで私たちの方も、心が緩み関係が築けてきたのかなと感じることができました。そうすると、身体は正直で、表現が変わります。ワークショップに向かうそれぞれの気持ちが変わっていくのです。

同時期に、「てあわせのワークショップがなくなったら、どうするんだろう」という不安の声や、保護者の方々からあがるようになりました。このワークショップが、現地の方たちにとって何らかの意味を持ち始めてきたからだだと思います。当初は、3年という目標で進んでいました。その後については、誰も答えをもっていないし、私自身も明確なビジョンはなかった。「一緒に考えていきましょう」くらいしか言えなかったんです。

それでも、現地の方たちは遅く、自分たちがワークショップのファシリテータを務めるという試みをはじめました。ファシリテータの勉強をしたいということで、みんなで学び合う養成講座を、今年度は2回開催して、多くの方々が積極的に参加してくださっています。そうしているうちに、新しい生き方というか・・・保護者の方々や施設の先生方が、皆の前で身体表現のファシリテータになる。これまでの人生で、ダンスなど経験したことがない方たちが、3年たって、てあわせワークショップを継続するために「自分がファシリテータを担う」と決めて、実際に実行されるという展開は、開始当初は誰も考えもしませんでした。まさに新しい何かが、自己の中に



[ファシリテータ養成講座 2015年6月 石巻市]

生まれるということですね。そうすると、ワークショップの場がより活性化されて、相互に表現を引き出し合い、みんながファシリテータとなっていくのです。未来へと向かい「生きていく」表現というのでしょうか、それぞれが潜在的に持っている、見えなくなっていたもの、誰も触れられなかったものが、関係性の中で現れてきた。それを引き出したのは身体での共創表現じゃないかと。その可能性を、私は信じたいのです。

—— 大人の方たちも、「誰々のお母さん」ではなく、一人の人間として参加されていますね。

N: やはり、それぞれが一人の人間として、全ての人と対等に表現をする。ワークショップの現場だけではなく、「生きている」そのものが表現だと思っています。

先日は、現地の方々が、石巻でのインクルーシブ社会の実現を目指したイベントに参加し、その場に居合わせた市民の方々を誘って、一緒にあわせ表現をされたそうです。こうした試みを、もっと社会の中に広げていきたいという思いが生まれたのではないのでしょうか。被災地から新しい何かを発信したいというお気持ちもあることと思います。つながりや絆という言葉は、震災当時の社会的キーワードでした。現地に伺うと、目に見える「ものの世界」だけでなく、目には見えない「こころの世界」もまた、深く傷ついていると感じました。一瞬のうちに自分の人生の様々なことが変わってしまうのです。未来に向かって「生きていく」ことをどう考えたらよいのか。生き残ったことや被害が小さいことへの罪悪感のようなもの、そんなことを感じる必要はないのに、感じて暮らしている方も多くいらっしゃいます。それらを超えて、新しいコミュニティをつくっていかようとしている。ワークショップに参加してくださる方たちの中では、このような未来への思いと、身体での共創表

現とが、どこかで重なり合うのかもしれませんが。

現地の方たちがファシリテータをされると、この地に暮らす人たちが、いかに自然と一体化した感覚で生活されているかに気づかされます。それをお伝えすると、「そうなんだ」って、あちらも気づかれる。自己に気づくことも共創表現の価値です。他者から照らされて自己がみえてくるのだと思います。本当にすごいですよ、自然を通してイメージがどんどん広がって。海も川も山も。その奥行きと一緒に表現を創ってみないとわからない、そうした出会いを得ることで、それぞれの私が豊かになり、変わっていくのです。

—— この先、ワークショップはどこに向かって進んでいくのでしょうか。

N: それは・・・わからないですね。でも、粘り強く、一生懸命取り組んでいると、未来の方から、進むべきかたちが浮き上がってくるような感じがします。現在の自分が想定できることは、たかが知れているのだと思います。現在を積み重ねていく中で、未来の方から「こうだよ」と。その方が、ずっと広くて、深い。

研究も、同じではないのでしょうか。もちろん、最初からきちんと問いを立てることは大切です。しかし、研究のビジョンは、すぐそこにあるのではなく、遠い先の広くて深い場所にあって、絶えず自分自身に問いかけ、試行錯誤を繰り返すうちに、かすかに何かが輝きはじめる。私自身、目先の問題を解くだけでは、実践も研究も続かないです。

今後、てあわせワークショップの運営の主体は、現地の方たちに代わっていくと思います。しかし、私自身が停滞すると、自己を変容させ、先に進もうとされている現地の方たちから置いていかれてしまいます。この年月を通して発見した新

しい課題に向かって踏み出すこと、発見した問題を、次の実践や研究につなげていく、それが、これからも共創表現を続ける最低限の資格というか、在り方だと考えています。表現への愛情を持ち、身体や表現の可能性を信じて、歩み続けたいと思います。

一昨年から、身体での共創表現のワークショップを、石川県の生活介護施設でおこなっています。こうした福祉施設であわせ表現を行って、何が一番変わるかというと、職員の方たちなのです。「つながらない」と思って接していた障害者の方々が、「こんなに表現して、自分をだしてくる」と。利用者と支援者が相互に引き出し合うことで、生活の場全体が変わっていくのでしょう。また、石巻・東松島のワークショップには、岩手県花巻市の認知症高齢者施設の職員の方々も、遠方から参加してくださっています。それぞれの身体に根差し、草の根がはるようにネットワークが広がっていけばいいと思います。でも、本当に必要なのは、ゲーム漬けになっている都会の子どもたちかもしれないですね。私たちの活動は、社会の见えない隙間を表現で埋めていくようなもの、しかし、こうした部分こそが、それぞれが生きる社会の質にとって大事ではないかと思っています。身体での共創表現の感覚を基盤に、社会的共創への可能性が開かれれば、素晴らしいと思います。

—— 西先生にとっての石巻・東松島のワークショップとは、どのような存在なのでしょう。

N: 居場所になっている感じがします。何より表現の場が好きだというのが根底にありますが、被災地の、津波の跡に身を置いた時の自分自身の身体感覚は、生涯忘れられません。現地で被災された方たちとはくらべものにはなりませんが、「ここから何かが始まる・・・」という思いでこの4年間を過ごしてきました。そういう意味では、石巻・東松島市に出かけなくなっても、現地とはいつもつながっていると感じます。出会った方々の温かさや、生きていくことへの真摯な姿勢も含め、自分の人生の居場所の一つです。

—— 私もワークショップに参加させていただき、身体が震えるような体験を通して、生きる姿勢が変わったと感じる一人です。本日は、本当にありがとうございました。最後に、若手研究者へのメッセージをお願いできますか。

N: 身体表現は素晴らしい可能性を持っています。表現への愛をもち、その可能性を信じること。目先の小さな問題にとらわれずに、広く深い未来にある輝きに向かって、一緒に頑張りましょう。

◇第67回舞踊学会大会のお知らせ◇

第67回舞踊学会大会 テーマ「福島の民俗芸能」

開催日：2015年12月5日（土） 6日（日） 会 場：福島大学

内 容：一般研究発表、講演、シンポジウム、体験ワークショップ

第1日目 12月5日（土） 受付開始：9:30 【L4】

■一般研究発表 [各発表15分・質疑5分]

第1会場【L2】

予定時刻	氏名	所属	題目	座長
10:00～	木場裕紀	東京大学(院)	アメリカ高等教育における舞踊の歴史：ウィスコンシン大学マディソン校を事例として	松澤慶信 (日本女子体育大学)
10:20～	藤田明史	関西学院大学(院)	映像・言葉・身体 ―フォーサイスと舞踊記録―	
10:40～	小島理永 野村照夫 来田宣幸	大阪大学 京都工芸繊維大学 京都工芸繊維大学	ヒップホップダンスのステップにおける楽しさの表現 ―ニュージャックスイングに着目して―	
11:00～	柳原健二	岡山大学(院)	表現運動・ダンス授業における「恥ずかしさ」の言説に関する研究	高橋るみ子 (宮崎大学)
11:20～	鈴木 純 村田芳子	筑波大学(院) 筑波大学	ダンス必修化による中学校の授業の実態 ―創作ダンスと現代的なリズムのダンスに着目して―	
11:40～	村田恭子	愛知東邦大学	創作ダンスの授業における否定的イメージを持つ生徒の変容	

第2会場【L3】

予定時刻	氏名	所属	題目	座長
10:00～	萩原大河 関 典子 國土将平	神戸大学(院研究生) 神戸大学 神戸大学	動作因果関係を考慮したターンの評価観点の検討	森 立子 (日本女子体育大学)
10:20～	今井静香	岡山大学(院)	オイリュトミー経験がダンサーに与える影響	
10:40～	伊藤萌子 石崎雅人	東京大学(院) 東京大学	クラシックバレエ鑑賞における経験者と未経験者の違いの分析 ―視覚パターンと言語的印象の観点から―	
11:00～	岡 千春	東京成徳大学	舞踊する身体における自己の客体化について	外山紀久子 (埼玉大学)
11:20～	木村 覺	日本女子大学	ノヴェールのバレエ理論における優美とピュグマリオンの欲望	
11:40～	柿沼美穂	国立環境研究所	動きを言語化する ―運動感覚の言語化の試みとその意味―	

■12:00～13:00 昼食（理事会【M3】）

■13:30～16:00 〈福島民俗芸能民俗：民俗文化と教育〉 総合司会：鈴木裕美子 司会：村田芳子

13:30～15:00 第一部 特別講演【L4】 懸田弘訓 講演①「福島の民俗芸能」 講演②「福島の民俗文化と教育」

13:20～16:00 第二部 体験ワークショップ【第一体育館】 ①会津のかんしょ踊り ②いわきのやっちき踊り

■16:20～17:20 総会 【L4】

■17:40～19:00 懇親会 【大学会館2階「グリーン」】

第2日目 12月6日(日) 受付開始:9:30 【L4】

■一般研究発表 [各発表15分・質疑5分]

第1会場【L2】

予定時刻	氏名	所属	題目	座長
10:00～	中野優子 清水大地 岡田 猛	東京大学(院) 東京大学 東京大学	大学生を対象とした即興ダンス授業実践の教育的効果 ー表現活動や日常生活における学生の心理的変容に着目してー	八木ありさ (日本女子体育 大学)
10:20～	野邊麻衣子 西田英司	宮崎大学教育文化学 部附属小学校 宮崎大学教育文化学 部附属中学校	表現・創作ダンスとアクティブ・ラーニング	
10:40～	高橋るみ子 野邊壮平	宮崎大学 宮崎大学(院)	表現運動・ダンスにおける複数の指導者(外部指導者を含む)によ る効果的な指導のあり方	
11:00～	向出章子	奈良女子大学(院)	表現運動の授業の前後に見る友人関係の意識の変化	村田芳子 (筑波大学)
11:20～	鈴木瑛貴	お茶の水女子大学 (院)	身体表現活動における保育者と子どものかかわり合い ーPAC分析と映像記録に基づいてー	
11:40～	大橋さつき	和光大学	福島の子をを対象とした「創造的身体表現遊び」の実践	

第2会場【L3】

予定時刻	氏名	所属	題目	座長
10:00～	阪本麻耶	四国学院大学	大学におけるアーティスト・イン・レジデンスの可能性 ～日独協同制作公演 SARPvol.9”・・・unter dem Himmel ist der Wind・・・”実践報告～	貫 成人 (専修大学)
10:20～	豊福彬文 矢吹修一	んまつーボス いわき芸術文化交流 館アリオス	いわき芸術文化交流感アリオスと《んまつーボス》が探ったダンスア ウトリーチの在り方	
10:40～	岩澤孝子	北海道教育大学	タイ・コミュニティ教育における伝統芸能の役割	
11:00～	近藤洋子	民族舞踊研究所 「舞スタジオ」	民俗舞踊の変遷 ー秋田県の盆踊りを例としてー	古井戸秀夫 (東京大学)
11:20～	木村はるみ	山梨大学	災害と芸能 ー実演芸能の果たす役割ー	
11:40～	亀谷真知子	東京外国語大学	福島県じゃんがら念仏踊りの伝承 ー歴史と東日本大震災の取り組みー	

■12:00～13:30 昼食【L1～L4】

■13:30～16:00 <震災と復興> 総合司会:鈴木裕美子 司会:古井戸秀夫

13:30～14:00 基調報告【L4】 懸田弘訓 「福島の震災と復興」

14:10～16:00 シンポジウム【L4】 報告①俵木悟 「災害後の生活と民俗調査の効用」

報告②橋本裕之「支援から協働へ ー民俗芸能を復興する/させる方法・序説ー」

コメンテーター:懸田弘訓

掲示板

■「Who Dance? 振付のアクチュアリティ」

会期:開催中～2016年1月31日(日)

休館日:12月16日, 12月23日～2016年1月5日, 1月10日～12日

会場:早稲田大学坪内博士記念演劇博物館2階 企画展示室

入場無料

主催:早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

関連イベント

(1)ロジェ・ベルナット「春の祭典」

構成・演出:ロジェ・ベルナット

日時:2015年12月12日(土)時間未定

会場:早稲田大学学生会館B201

*事前申込制/先着順

参加無料

(2)日仏ダンス会議「思考と身体のパ・ド・ドウ」

出演:ジュリー・ペラン、パトリック・ドウ・ヴォス他

日時:2016年1月16日(土)時間未定

会場:大隈記念講堂小講堂

*事前申込制/先着順 参加無料

■「ダンス王国Shizuoka」

概要: ダンスの持つ力やコミュニティダンスの可能性を多くの方と共有したいと考える市民に企画へ参画していただき、様々なアイデアを出し合って、ダンス王国Shizuokaならではの《コミュニティダンス・フェスティバル》を開催する。

日時: 2016年2月13日(土)・14日(日) ※2月12日に出演者向けの前夜祭を予定

会場: 静岡市民文化会館(静岡県静岡市葵区駿府町2-90)

内容: ①全国で活動するグループによる、コミュニティダンス5作品<公募>

②静岡オリジナル コミュニティダンス作品 [演出・振付:北村成美]

③<ダンス王国Shizuoka>プレゼンツ作品、4作品

④静岡で活動する市民ダンサーによるダンス作品/グループ、4作品<公募>

⑤その他、フェスティバルを彩る様々な関連企画

HP http://www.scch.shizuoka-city.or.jp/special_dancekingdom.html (静岡市民文化会館)

事務局便り

会費納入のお願い

会員の皆様に向けて、今年度(2015年度)の会費納入のご案内を5月下旬に送付させていただきました。

学会の活動は会員の皆様から納入いただいた会費で運営しております。ご理解、ご協力の程、どうぞ宜しくお願い致します。また、現在事務局では、会員の皆様それぞれに、過去5年分にさかのぼった会費の納入状況をお知らせするとともに、未納分の精算をしていただいております。おかげさまで順調に会費納入率が向上しております。ご協力いただきました皆様、誠にありがとうございます。この他、会費の納入につきましてご不明な点がありましたら事務局までご連絡ください。

上記に伴い、6年以上にわたり会費の納入がない方、また長期にわたって郵便物が宛先不明で返却されている方は、理事会の承認を経て除名となります。舞踊学会からのご案内がお手元に届いていない場合には、除名となっている可能性がございます。長期ご不在や行き違いをご心配の場合には、事務局までお問い合わせください。

会員名簿閲覧等

会員の皆様には、学会HPの[Web会員名簿](#)から、IDとパスワードを用いて名簿を閲覧していただくことができます。IDとパスワードについては、メーリングリスト登録会員対象に2015年2月26日付けで配信されました【舞踊学会ホームページ、リニューアル作業完了のお知らせ】という標題のメールをご参照下さい。

また、情報更新をご希望の方は、同様にHPの[会員情報の変更申請](#)から入力していただくことができます。会員名簿への掲載可、不可を選択できる項目については、その扱いの変更につきましても、このフォームをご利用ください。取りまとめ作業の都合上、ご入力いただいた情報がWeb名簿上で反映されるまでには時間を要します。予めご承知おき下さい。

舞踊学会事務局

〒157-8565 東京都世田谷区北烏山8-19-1

日本女子体育大学 松澤研究室

Tel&Fax: 03-3300-2423

E-mail danceresearch.info@kagoya.net

【編集後記】

今号では、今次の学会大会テーマに沿っているとはいえないものの、とてもデリケートな主テーマを選択したという感慨を抱いています。玉稿をお寄せいただいた会員のみなさまには、衷心より感謝申し上げます。ありがとうございました。（大貫秀明）

今回のテーマを通じて、「踊ること」が持つ力について改めて考えさせられました。（森）

少しずつの希望が大きな力を呼び、人や社会を動かすと実感しました。ご寄稿、インタビューにお応え下さった先生方に深く感謝申し上げます。（弓削田綾乃）

人として何をするかを考えているだけで何も始まらない自分が恥ずかしくなります。先生方ありがとうございました。（高橋）

ニューズレター第9号

発行日：2015年11月29日

編集：大貫秀明 森立子 弓削田綾乃
高橋系子 仙田麻菜（編集補助）

発行者：舞踊学会（会長：柴真理子）

ご意見、ご感想、掲示板への投稿希望は以下のアドレスまでお願いいたします。

ニューズレター編集委員会

danceresearch.newsletter@kagoya.net